

## 放送開始前後

石井光次郎 衆議院議長／放送開始当時は朝日新聞業務局長で、東京放送局理事をかねる。

新名直和 東京市政調査会常任幹事／初代の東京放送局常務理事として放送業務を開拓。

徳川夢声 漫談・随筆家／放送開始前からラジオ放送に出演、第一回放送文化賞を受く。

木村 毅 評論家、早大名誉教授／当時は労働党国際部長。『日本放送史』に編集顧問として参加。

島浦精二 司会。NHKアナウンサー／ロサンゼルスオリンピック大会の「実感放送」で有名。

### 新聞社が実験公開

島浦 放送の歴史といえますと、『日本放送史』に歴史というものはあるわけですが、その歴史のまわりのこととか、エピソードとかをまじえて読みものにしようというのが、この座談会のねらいです。いわば《社会の中の放送史》とでもいったものです。そこで徳川さん、放送以前の話から……。

徳川 大正一三年に上野の池ノ端で、発明品博覧会というのがあったんですが、そのとき、「無線電話」として出品されたのがラジオです。それで当時の人は

「なんだ針金の力を借りずに話がつたわる」

「そんなばかなことがあるか」

と言ってるね笑)。説明役が大羽仙外。後に京田武男アナウンサーと元祖争いのようになりました。

新名 『報知新聞』の企画部長の煙山二郎という人が、いろいろとプロデュースしていたんです。だから『報知新聞』の囑託であった大羽仙外が、アナウンサーをしていたわけなんです。

徳川 京田君が『(東京)日日(新聞)』でした。あれは各社協力したわけですか。

石井 ええ、各社でやったんですよ。当時、私も大阪から東京に放送する。そしてそれをまた放送しかえすというのが非常に自慢でした。夜、みんなが寝静まった静かなころ聞くと、わずかに聞こえてくるんだ(笑)。屋上へ出てぼくらは一時、一二時ごろレシーバーで聞いた。

木村 大正一一年ごろから『太陽』という雑誌に毎月「無線電話」という記事が載っていたんだよ。それで、だれが「放送」ということばをつくったかということが問題だね。『放送史』をやるときに調べてみたら、もう大正四年ごろ日本の艦隊が地中海に行ったときに、イギリスの軍艦から軍艦へ放送をやっている。それを日本でもキャッチして、そのときに日本海軍が放送ということばを世界大戦のときに用いとるんですよ。それが最初のようにですね。

新名 結局、新聞社が実験公開をやりましてね。『朝日』、『日日』、『報知』、それから大阪の『時事』、『毎日』、『朝日』。名古屋では『新愛知』。それに続いているいろいろの実験家が機械を組み立てて、どんどんやった。この新聞社と素人実験家の公開ということが、非常に全国のアマチュアを刺激しまして、放送というものを開始する機運を醸成した最も大きな原因ですね。

アメリカのKDKAが世界ではじめて放送を開始したのは一九二〇年(大正九年)ですが、それが伝わると一〇年、一一年にはダツとみんな出てきたんですから……。そして二年の八月三〇日までには、通信省もこれはやらなければならぬというんで実際の調査を完成しておった。それが大震災ですっかりやけてしまっ

たんです。そういうわけですから、当然機が熟して果物が熟して地に落ちるような受け入れ体制が十分あったんですな。

島浦 大震災の流言蜚語が、放送でもあれば一ぺんにおさまったというような感じは、皆さんにあったでしょう。

新名 放送があれば朝鮮人騒ぎ、朝鮮人が暴動を起したという流言がとび大勢の人が殺された（なんていうのはなかったでしょうね。

石井 そうでしょうね。

新名 それと同時に、震災の報道が大阪に停泊中の米軍艦にわかって、それからアメリカへ無線電信で急報したものですから、救援物資が時を移さずサーッときましたね。また、大阪から米を回送して、幸いに食料の争奪もなかったというようなことは、無線電信のおかげですけれども、とにかく有線なんて有事のときには役に立たんということがわかった。

島浦 大正末期、昭和の初めなんか、いい時代でしたよね。そういう中でラジオが新しいものとして生まれ、それを社会が受け入れた。戦後のテレビは、一つのブーム的現象になってしまいましたけれども、ラジオというのはそれほどなく、着実に、しかしわりあい急速に広がっていきましたね。

徳川 やはり、震災の朝鮮人騒ぎなんていうものが、民衆の潜在意識にあって、これが速報されていたらどんなに安心かしないという気持ち、ラジオの効用というものを認識させたんでしょうね。

木村 震災のときに東京の『朝日新聞』は出ないので、大阪から飛行機で運んできたものです。ぼくはあのころ続きものを書いておったから、ぼくのところへは飛行機で新聞がくるんですよ。そうすると町中の人間が寄ってきたんですよ。だから、もっとほかに頼りになるものが、もう一つぐらいあってもいいという気持ち

ちは強かったでしょうね。

### 民営論が消えたいきさつ

徳川 とにかく、向こうの映画雑誌などに、ホラ貝のようなスピーカーのついたものをウォーレスペアリー（俳優）が誰かが聞いている写真があった。それが『キネマ旬報』に転載されたんだが何をやっているのかわからない。「ラジオホーンとは、蓄音機の種類なり」って書いてあった笑。

島浦 形からきたわけですね。

新聞社が放送に非常に熱心だったのは、マスコミの一分野だということなことでなしに、新しい事業としてでしょうね。

石井 そうでしょう。新聞社というのは何でもかんでも新しい企画のものをつかまえてひとつ抜けよう、抜けようとしている。それには何か新しい企画はないか。すると、こういう無線電話があり、外国ではほとんど流行はやっておるものだ。何かわけはわからんけれども、ひとつこれをというんでわれわれのほうもやったし、各社みんなねらいだしました。

徳川 ミロのビーナスでもうけようというんじゃないですか笑。

石井 ソロバンも何もかまわない。これはやるべきだというんです。その時分は新聞社の数がだいぶ整理はされたけれども、まだ一ぐらいいりました。もうネコもシャクシもみんな独自で放送局をつくる出願をした。それに事業家も集まって、結局二〇いくつかのたくさんの数になったわけです。

徳川 その競争が現在のNHKを成り立たす一つの触媒となったわけですね。

島浦 そういうことですね。初めは、その当時の逓信省はやっぱり民営論だったんですね。

新名 民営論なんです。元来通信というものは、これは特定人間の意思の伝達機関なんです。ところが放送というものは特定人間の意思の伝達ではありませんね。だから、ほんとうは放送法という別の法律を制定しなければならんわけです。しかしそうすると内務省と通信省と権限争いが起こる。新聞の取り締まりと同じように内務省側は必ず口を出すんで、ともかく少々無理して通信という系列の中に入れちゃった。広義の無線電話と思えばいいわけなんです。

それで結局通信省がやると、無線電話は国营ですから、当然放送も国营にするという論が出てくるんですけど、しかし番組の編成なんていうのはこれはちょっとお役人では無理だということが、めいめい頭にあるわけです。それと、あのころは通信省の財政が非常に困難で、放送なんていうものは、もうかるんだか、もうからないんだか、将来どういふふうになるんだかさっぱりわからない。そんなものに予算を出してもうまくいくかどうかという懸念もあったんです。それで結局は、最後まで民営論だったんですね。

島浦 その民営論がどうしてああいう公益法人、公共企業体に変わったんですか。

新名 それは、東京と、名古屋はまとまったんですが、大阪は出願が乱立してまとまらないので收拾がつかない。これはとても民営ではいけないと結局、最後は官営でなく公営になった。

多くの出願者の中に電話協会というものがありまして、これがどうしても公共事業であるから、営利を目的としてはいかんという正論をばくんですよ。これに『朝日』と『日田』が東京で賛成しちゃったんです。それで非常に有力になったんですね。けれども大阪では、どうしてもこれは会社でなくてはいかん、ということおったんです。

島浦 大阪の出願は株屋さんが多かったんですね。

新名 これでもうけようというつもりなんです。だから、なかなかまとまらないはずだ(笑)。

木村 逋信大臣が犬養毅で、これが非常に勢力が強かった。あの人はああいう民主的な人だから、民間説が初め強かったともいえるようですな。

島浦 イギリスでも初めはBBCのCはカンパニーのCだったんです。それを政府が委員会を設けて研究させた結果、コーポレーションにした。その委員会の結論はNHKが出来るより早く出ているが、実際にBBCカンパニーがBBCコーポレーションになったのは、NHKが公共企業としてスタートしたあとですね。

新名 そうなんです。アメリカが民営でBBCも民営でした。だから、どうしても日本も民営という論が一応耳に入りやすいですね。

島浦 そのときはあんまりもうかるとは思わなかったんでしょう。

新名 ところがあの時分に土地建物が三十何万円それから機械が二十何万円。結局、固定資産というのは五〇万円でしょう。それに対して五十万円の手持ち資金を持っていて借金は全部返してしまっている、もうかっただんですな(笑)。それで三合併(東京、大阪、名古屋の放送局を合併して社団法人日本放送協会を組織した)をやったんです。借金なしの五〇万円の純益ですから、これは大きい。その金で全国に放送局を作ろうというわけでした。

### 卓見だった《大ブロシキ》

島浦 そこで初代の総裁に後藤新平伯をもってきたんですが、これはだれの知恵ですか。

徳川 後藤新平というのは、何でも初代にもってくりや言んでいる人ですよ(笑)。

石井 そう、こういうふうなものに、まことにふさわしい柄合いの人ですよ。

徳川 後藤といえは大ぶろしきだったんですよ。しかし、その大ぶろしきが、いまは小ぶろしきぐらいでさ

あな。東京駅にしてもあのころに原っぱへこんな大きな駅を建てて、何にするつもりだといわれた。あれが  
いま狭いんだから。

新名 後藤さんということをお願い出したのは、われわれの伝説では石井さんと煙山二郎さんですよ。そして  
後藤さんの家へ立ってくださいと頼みに行った中に、石井さんは入っていらっしやいますよ。

石井 そうでしたね。そのころは復興院総裁をやめて、何もしておられなかった。

島浦 それはどうかすると、お役人が天降ってくるのを牽制するというような意味もあったんじゃないです  
か。

それにああいう人を据えておけば小さいゴチャゴチャしたものは……(笑)。

石井 そういう配慮があつたことだったようですね。

木村 しかし、この人選は最適任ですよ。

島浦 それと、もう一つ驚くのはその後藤さんが、東京放送局の仮放送の一番初めの日に、新名さんの司会  
で「無線放送に対する予が抱負(付録参照)」という大演説をブツいていますね。たいへん立派な演説で、大体今  
日でも通用するものなんです。放送というものは単なる享樂的なものじゃない。国民生活、社会生活、個  
人生活というものの中に、非常に影響のあるものだということを喝破している。この演説が一体後藤さんの  
大ぶろしきか、先ほどの続きで石井さんあたりの……。

石井 いやいやぼくはそこまでこしらえない(笑)。新名さんじゃないの。

新名 実は、ぼくが書かされました。

島浦 新名さんが書かれた？　そうですか。新名さんは、仮放送開始のときの番組を見ますと司会者なんで  
すよ。これは放送における司会業の第一号ですよ。そうですか、新名さんが原稿の作者ですか。

新名 私が書いて、後藤さんの周囲の人が少し手を入れたんです。あれは一五分ぐらいかかったと思いますが、三分おきにちゃんとしるしをつける。何分でどこまでいかなくはならんという予定を書くんです。そして、それが少し早かったら向こうからパツと何か合図をするんです。そうするとその次は少しゆっくりして、第二段目のところで調節する。原稿も巻き紙で、あんまりさらさらと音がしてはいけないというので、日本紙でそばでやっても音のせんような紙を選ぶとか、用意周到でしたね。

徳川 われわれが後年ガサガサって音がして失敗をして、やわらかい紙を選ぶようになったんですよ。初めからやっていたのは偉いもんだな。

私も物語をやるとき行数を全部数えて、それを放送時間で割って、三分ごとに赤い線を引いて、ストップウォッチを横目で見ながら練習したもんですよ。

新名 後藤新平さんの大ぶろしきについてはエピソードがあるんですよ。

それは大正一五年の正月でしたね。放送局の予算を編成する時期になって、ラジオ放送研究所の計画をつくって、持って行った。そしたら「これは何だ、もっと大きなことを考える」というんです。こっちはよっぽど進んだつもりで、後藤さんは調査好きですから、ラジオ放送研究所というのは、これはいいことを考えたとも言ってくれそうなものですが、「だめだ」という。そこで結局後藤さんが真意というものを話されたんです。それは、シナ大陸の中央に大電力の放送所をつくって……、

石井 そりゃ、超大ぶろしきだね(笑)。

新名 東亜全体にそれが聞こえるような大きなものをつくれ。それには収入があてにならんから、日本の放送から生ずる利益でそれをやれというわけです。

徳川 それは必ずしもぶろしきじゃないですね。



新名 ええ。後藤さんの命日に関係者が集まるんですよ。二、三年前のその席上で正力松太郎さんに話をしたんです。ちょうどその頃正力さんは、台湾か何かで放送を開始する技術上の援助をすることを計画しておりましたので「そりゃ、後藤さんとしては当然の計画だったな」ということを言っておりましたね。

### 遠慮した「ニュースの速報」

木村 最初の学者の講演は早稲田の高田早苗博士ですね。あれは官吏の井上哲次郎でももってきたきそなものだけれども、私立大学の高田早苗をもってきたところがおもしろい。民主的にいかなくはいかんといいえが、初めからあったとみえますね。

島浦 そのころの番組担当は煙山さんですか。

新名 試験放送の時は煙山君と若目田利助さんです。二人とも理事なんですが、理事が放送部長の職務代理で番組を編成しておったのです。

私どもは常磐津とぎわすと長唄きょうもとと清元の区別がわからないもんですから、初日に歌沢寅右衛門が出るようになっていたんです。ところが時間がきても寅右衛門さんがこないというんで、大騒ぎした。ところが向こうに女の人がすわっておる。

「寅右衛門は私です」……(笑)。

木村 しかし、よくあれだけの番組が組めたと思うね。あの頃ばくは労農党の国際部長をしていたんで、放送局からは呼ばれなかったけれど……。

島浦 大阪では初め、番組は『毎日』と『朝日』とが交代でやるということになりました、これもまた『朝日』と『毎日』との間がむずかしかかったらしいですな。

新名 交代でやることにして、実際は一日でやめちゃったんですな。

石井 向こうがあれを出したら、おれのほうはもっといいやつを出さなければいかんということで、たちまちできなくなっちゃったらしいね。

ニユースだけはずっと新聞社提供でしたがね。

島浦 ところで、後藤さんが放送の四つの職能というのを言っておられる中で、ニユースの速報というのが出ていないですよ。これは新聞社に遠慮したんじゃないですか。

石井 入らなかったのは、新名さんの新聞社に対する配慮ですな。その時分はなかなかもめたんですよ。どんどんやられたら、こっちは活字を拾っている間に、ニユースではなくなってしまうから、放送を助長すべきでないという議論まであった。それからニユースはわれわれに任せておけ、ほかのことをお前のほうでやれというような空気が、相当新聞社の中では強かったんだ。

徳川 あのころとしては、もっともな傾向ですね。

石井 ええ。ところが、われわれは、そんなことを言ったって、放送がはじまるのが現実にあるんだから、だめだといったって国民が承知するわけではない。むしろそれ以上のことを新聞がやるよりほか、しょうがないじゃないか。ラジオで聞いたって、目で確かめなくては承知しないのが、人間だと主張していたんです。

そのときどこかの事件を、ちょっと臨時放送か何かでやったことがありましたね。

新名 あれは州崎の大火。

石井 そうそう。すると、翌日の新聞をみんな待ちどおしくなったということがあった。それが一番いい例だということ、ぼくらはよくいったものですよ。

こんなことで相当初めはもめたから、最初の総裁の演説あたりは、新名さんも遠慮していますよ(笑)。

木村 やっぱりラジオのニュースをどつしても聞きたくなつたというほど、ラジオのニュースが重要性を持ってきたのは、シナ事変ですから、それより前まではラジオのニュースなんか聞いても聞かなくても、新聞社のお古と同じようなことだったんですね。シナ事変ころから新聞社より先になるようになって、ほんとうに待ちかねて聞くようになりましたね。

まずマイクに一礼して……

徳川 私は芝浦の仮放送の二日目でしたかね。二日目の出演者が六代目菊五郎と、神田伯山と私です。

石井 何をやられたんですか。

徳川 「サロメ」を読んだんです。ところが大きな声でやったからディストーションを起こしちゃって、さっぱりだめ。その前に、初めてのことだし、「映画なしでしゃべってビフテキの肉ぬきでソースだけさし上げるようなものだ」と、少しふるえながらお断わりを言った。その方は入っていて度胸が定まったから、ヨハネのせりふなどを大声でやったら、そのほうはあんまり聞えないんですよ(笑)。

木村 尾崎行雄なんか演説調に手を振るんで、前にあるマイクロホンをぶっとばして困ったらしいね。

徳川 講釈師か、浪花節なにわぶしだったか「エイッとばかりに真向上段……」というんでマイクロホンをひっぱりたいたというんだが……(笑)。

石井 当時マイクロホンは貴重品でしたからね。

徳川 毎朝ね、アナウンサーが「どうぞ、きょうもきげんよく」っておがんだもんだ(笑)。

木村 そのころは芸人で、舞台でやるのはいいが、ラジオには出ない、という人はたくさんいたわけでしょう。

徳川 たくさんいましたよ。ことに邦楽の家元なんていうのは、あれへ出ると寿命を吸い込まれちゃうとい  
うんです(笑)。

島浦 愛宕山の仮放送のときには、音楽伴奏というものは初めからついたものなんですか。

徳川 初めからついたんですよ。音で少しごまかさんと、どうも穴があいていかんだろうと思って……。

だから、仮放送で最初にやったのは「シラノ・ド・ベルジュラック」を、トリオ(三重奏)の伴奏で修道院の  
場をやりました。それから二度目にやったのは、ポールの「赤き死の仮面」というので、これもトリオの伴奏  
でやりました。

木村 へえ、それはまた、高級なものをやったんだなあ。

徳川 大高級ですよ。「宮本武蔵」なんていう通俗的なものはやらなかった(笑)。

島浦 とところで石井さん、ラジオ版というのができたのは、やっぱり『読売』が一番初めですか。

石井 ラジオ番組をはじめて載せたのは正力君ですよ。ほかの新聞も多少は紹介をやっておった。しかし、あ  
れほど思い切って全ページをさいたのは、正力君のところだけです。

木村 あれがなくてはわからないんですからね。読売が始める前に、日刊で専門の新聞みたいなのはありま  
したけれどね。

新名 ラジオ新聞という色のついたものでしょう。あれは新内しんないでも長唄でも何でも文句をみんな出したもので  
すよ。みんなそれをみながら聞くんですから、よくわかりますね。

島浦 先ほど申し上げた後藤新平さんの演説の中に、教育の機会均等なんていうことが書いてあるんですよ。

石井 まさに均等ですよ。

島浦 それから放送ができると、家庭というものはいままではただ寝るところであったが、一家団だんたん樂の場に

なるんだということも言っている。

木村 フランスの社会学の本に、ラジオとテレビがフランスの家庭を変えたのは、みんな夜になるとオペラなんかばかり見に行ってたやつが、家庭の茶の間に集まるようになったというのがある。

島浦 家庭の大変革だと書いていますね。アメリカでも、自動車の普及が人間の生活を家庭から外へひろげましたが、そのあとテレビが始まって、また家庭へ帰ってきたといわれていますが、とにかく放送というのはたいへんな影響力をもっていますね。後藤さんや新名さんがそれを見抜いておられたには敬服しますね。

徳川 とにかく、後藤さんのは中味のある大ぶろしきですね。いろいろ入っていたんですね。金銀さん……  
(笑)。

### 大学講座も計画

石井 最初の時分の受信機は鉱石式というんですな。「聞こえる、聞こえる」と騒いだものですね。

新名 最初、各女学校と中学校へずっと人を出してまわしまして、鉱石式の組み立ての講習会をやったんです。これはラジオのPRと、電気に関する知識の普及という、いろいろな含みがあったんですよ。

石井 新聞社でもラジオというものはこういうものだと、地方へ宣伝にまわったものですよ。新聞の拡張の意味も持っていたでしょう。大きなもので、一人じゃ持っていけないように重かったですね。

徳川 ラッパがつくのは高かった。いまのカラーテレビぐらいの相場がしたんですよ。

石井 新聞社で買った時分は、舶来のものなんで一、円ぐらいしました。それを持ってまわると実たいへんな人気でした。押すな、押すなで聞きにくるんですよ。

木村 東京の町でもあるのは酒屋か何かで、そこでやると早慶戦をつければ店いっぱいきたものですよ。広

津和郎君はそれを聞いていて、足をひかれてけがしたんでしよう。一つの町に一軒ぐらいでしたね。昭和四年になっても宮武・小川対立時分の早慶戦のラジオといったら、たいへんなものでしたからね。

徳川 松内則三さんていうのが、うまいんですよ。あれは芸でしたね。大ダレのくだらない試合が「そもそも力こもれる……」というふうに聞かせたんですからね。

石井 女子のアナウンサーもいますね。第一代は何といましたっけ。

新名 緑川秋子女史ですね。非常に美人でなかなか才女でした。

料理の講座を開いたところが男の料理の講話員はとも間違いが多くていけない。ちょっと何を入れて、ネギを何本入れて、塩を一つまみというところを、一にぎり、とやっちゃった。どうしても婦人アナウンサーでなければいけない。

それから子供の時間なんかも、やっぱり男だと、ちょっとことばが荒過ぎるから、やっぱり女性がいいだろうということ、女史を入れたんです。

島浦 大阪には巽京子という人がいましたし、名古屋には加藤綾子という人がいました。何かそれぞれ女の初代のアナウンサーというのは有名ですよ。

木村 何しろ高橋邦太郎君(現共立女子大教授)が料理の放送をやっているんだから……。投書したら高橋君はすぐやめさせられたけど(笑)。

新名 さっき木村さんから高田早苗博士の話が出ましたが、本放送が始まる前に私は、教育放送ということはどうしてもこれは大学の援助がなくてはいかんと、一番最初高田先生のところへ相談に行ったんです。田中穂積専務理事もその席に参加しまして、話が進んで行った。早稲田ばかりではいけないから、慶応にも行った。東大で古在由直総長にも会った。

そういうわけで早稲田、慶応、東大の三大学の援助を得て、ユニバーシティ・エクステンションをやるという計画だったんです。

とうとうそれは、実現しないでしまいましたけれども、やっておいたら、今日とまた違った形式での大学教育放送ができていたでしょうね。

木村 それは日本の教育の現状を大きく変えていたかも知れないな。惜しいことだったなあ。

### お茶代は月給さし引き

新名 徳川さん、あなたはNHKから一番最初何がしか謝礼をおもらいになったんでしょけれども、そのころ薄謝協会という名前がありましたか。

徳川 だいぶたってからですよ。初めは謝礼などもらうのはどうかしていると思ったくらいですよ。とにかく公共事業である……(笑)。

新名 最初は金一封でした。

五十何人の放送技芸員というのを囑託しました。各流の一流の人を何人かずつで、その方には放送技芸員を囑託するという後藤新平の名前で、厚い辞令書を送ったら、みなさんが非常に喜んでね。そのころは放送に出るのがご自慢なんですよ。

石井 その頃の話ですが、放送の先生がこられると放送部員も一緒にお茶を飲まないわけにはいかない。そうすると放送部員の分は月給から差し引かれるんです(笑)。

徳川 そりゃ、みごとだ。

新名 ラジオに出てくださる技芸員は、みんな公共のために犠牲を払ってくださるんだからというので、

お金や物質的には報酬を出しませんけれども、ただ感謝の意を表するために、煙山氏が下足をそろえるし、私はお茶を出したものです。

石井　とにかく、芝浦から愛宕山の時代には、いろいろの手を考え、それを実行するのにみな必死でしたね。  
新名　そうですね。放送局にいい敷地があるとなれば、ソレツと理事会をほうり出して見にとんでゆくぐらいのことはしょっちゅうありましたからね。



(付録)

東京放送局仮放送開始(大正十四年三月二二日)における後藤新平總裁演説の一部

(前略)

さて諸君、放送事業の職能は少くも之を四つの方面から考察することが出来ます。

第一は文化の機会均等であります。

従来各種の報道機関や娯楽慰安の設備は、都会と地方とに多大の懸隔がありました。御主人は外に於て諸種の文化的利益を享けつつある間に、家にある者は文明落伍者たる場合がありました。或る階級の者が受くる便益を他の階級の者が受けざる場合も亦無きにしもあらず、然るに我がラジオは、都鄙と老幼男女と各階級相互との障壁区別を撤して、恰も空気と光線との如く、あらゆる物に向つてその電波の恩を均等に且つ普遍的に提供するものであります。

第二は家庭生活の革新と申しましょか。従来の家庭なるものは、往々にして単に寝る処か単に食事する場所なるかの如くに考えられていたのであります。かかるが故に慰安娯楽の途は、之を家庭の外に求むるが常でありました。今や電波の放送に依りて家庭を無上の樂園となし、ラジオの機械を囲んで所謂一家団樂家庭生活の真趣味を味わう事が出来るではありませんか。

第三は教育の社会化であります。

放送の聴取者は、今後数年を出でずして幾万幾十万に達するであります。斯くの如き大多数の民衆に對して、而も家庭娯樂の団樂裡にある人に向つて、眼よりせずして耳より日々各種の學術知識を注入し國民

の常識を培養発達せしむる事は、従来の教育機関に一大進歩を与うる所でありまして、従<sup>したが</sup>って其の効果の顕著なるのは、限られた講堂教育の到底企て及ぶ所ではありません。

第四は経済機能の敏活<sup>もろろ</sup>という事であります。

海外経済事情は勿論<sup>もちろん</sup>、株式、生糸、米穀、其他の重要商品取引市況が最大速力に於て関係者に報道せらるる事に依って、一般取引の状態が益々活発に運動する事は申す迄もありません。従来の有線電信電話時代の経済機能に対し、ラジオは正に一大革新を与うるものであります。(後略)

● 『放送夜話 座談会による放送史』(日本放送協会編、日本放送出版協会、一九五八年)所収。

● 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。

● PDF化にはL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>Xでタイプセッティングを行い、dvipdfmxを使用した。

ラジオ関係の古典的な書籍及び雑誌のいくつかを

ラジオ温故知新(<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/index.html>)  
に、

ラジオの回路図を

ラジオ回路図博物館 (<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/radio/radio-circuit.html>)  
に収録してある。参考にしてほしい。